

近世天草・島原の遠見番所と烽火台

岡 寺 良

はじめに

寛永15年(1638)の島原・天草一揆の終結とともに、江戸幕府は、キリスト教の禁教と限定的な通商の厳格化、いわゆる「鎖国体制」を敷くことになるが、これに伴い、長崎をはじめとする日本の沿岸諸国には、異国船監視のための遠見番所が設置されることとなった。

基本的に遠見番所の設置は各藩に任されていたが、幕府の巡検使が視察する対象となっていたことからわかるように、幕府の要請に基づくものでもあり、遠見番所の設置は、幕府の異国船に対する沿岸警備体制の表れと言ってもよい。

筆者は、「鎖国」体制とともに諸国沿岸部に設置される遠見番所、烽火台、台場などの施設は、江戸幕府をはじめとする日本の近世における海防意識を示すものとして、「近世海防遺跡」として研究を進めてきた(岡寺2019・2021a,b・2022)。しかしながら、これらの施設については、考古遺跡としての重要性・認識が薄く、各地域で紹介されることなどはあっても、全国的に事例を収集し、比較検討を行うことはこれまでほとんどなされてきていない。台場などは、近世幕末史を語るうえで重視されており、調査研究は比較的進められてきてはいるものの、遠見番所や烽火台については、その重要性はおろか、考古遺跡としての認識に乏しく、ほとんど手つかずの状態であるといってもよく、個別事例の全国的な状況把握が急務であるといえよう。

本論文にて採り上げる肥後国天草および肥前国島原も、近世期を通じ、主に長崎方面へ向かう異国船監視を行う遠見番所が各所に置かれ、その情報を伝達する烽火台(狼煙台)なども現地には残されており、異国船到来の情報伝達をどのように行っていたのか、具体的に知るには格好の事例である。まずはこれら天草・島原の遠見番所・烽火台の現地の状況、残された遺構の概要について紹介し、天草～島原において行われた異国船監視の一端を探ることとしたい。



図1 天草・島原の烽火台と遠見番所位置図
(数字は烽火台間の距離(km))

1 近世の天草・島原支配と遠見番所・烽火台

(1) 近世の天草・島原支配の概要

天正15年(1587)の豊臣秀吉による九州平定ののち、肥後国天草は、佐々成政、小西行長の支配を経て、慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の後には、肥前国唐津藩主となった寺沢氏の支配下となり、天草の富岡には代官が置かれた。戦国時代には天草五人衆とよばれる国衆たちが割拠し、集権的ではない支配体制が続き、キリスト教信者も多い中、禁教と圧政に耐えかねた人々が、寛永14年(1637)に起こしたのが島原・天草一揆(島原の乱)であった。一揆の鎮圧後、寺沢家は天草領を没収され、天草郡4万2千石は、富岡藩として山崎家治が入る。寛永18年から寛文4年(1664)までは、天領として鈴木家が代官として富岡に入った。寛文4年から同10年までの戸田氏富岡藩の時代を経て、寛文11年以降は天領となった。天領となって以降は、豊後日田代官、あるいは譜代の島原藩の預かりとなっていたが、享保5年(1720)からは、天草全島が島原藩預かりとなり、途中一時的に預かりが解除されることはあったものの、幕末の文化9年(1812)まで継続した。

(2) 天草・島原の遠見番所と烽火台

① 『肥後国誌』記載の天草の遠見番所・烽火台

『肥後国誌』「天草郡年表事録」には、天草の遠見番所設置に関する記事が掲載されている。最初に遠見番所が設置されたのは、島原・天草一揆の3年後、天草が天領となった寛永18年(1641)のことである。

「遠見御番八人 七石に弍人扶持 内富岡四人、大江崎弍人、魚貫崎弍人 御定」とあり、富岡、大江崎、魚貫崎の3か所に遠見番所が置かれたことがわかる。

また、万治2年(1659)には、

「大野崎 高濱村にあり 遠見御番弍人御建始 享保五子年に至富岡え御引移(後略)」とあり、万治2年から享保5年(1720)まで、高浜の大野崎にも遠見番所が置かれたことがわかるが、享保2年の記事に、上記のとおり大野崎は廃され、代わって、富岡の4人を、牛深と崎津にそれぞれ遠見番人2人を分け置き、遠見番小屋を新規に建てることとなったとあり、年代の齟齬が若干見られる。

さらに享保5年には、

「今年放火場始 魚貫崎一ヶ所 高濱之荒尾嶽一ヶ所 富岡白岩崎一ヶ所 二江通詞島一ヶ所 右四ヶ所に其村より茅薪積立置候 此人足賃年々郡割に相成候 御見分は本多忠兵衛殿御越なり」

とあり、この年から、魚貫崎、荒尾岳、富岡白岩崎、通詞島の4ヶ所に烽火台(放火場)が置かれたことがわかる。

② その他記載された天草・島原の遠見番所・烽火台

近世地誌の記載による天草の遠見番所・烽火台の設置等については以上のとおりであるが、さらに出典不明ながら、他にも烽火台があったとするものがある。

渋江鉄郎の記載には(渋江1986)、享保5年に設置された烽火場について次のとおり、詳しくふれ

ている。

「島原・天草の乱以後、事件発生を速報する遠見番所が設けられていたが、形だけしか残っていなかったため、新しく魚貫崎、高浜の荒尾嶽、富岡の白岩崎と元袋山、二江の通詞島に烽火場を置き茅や薪を積んでおいた。すなわち荒尾嶽に烽火があがると白岩崎でこれをうけ、元袋山でひきつぎ、ここから陣屋（富岡陣屋のこと）に通報する。陣屋では通詞島に烽火で知らせ、それが口之津のノロシ山に伝わり、南有馬の鳳上岳（烽上岳）へ、そして島原城に速報される仕組であった。これが検分役として藩（島原藩）から本多忠兵衛が出役して烽火場を巡視した。」（カッコ内は筆者加筆補足）

この記載は、前段については前述した『肥後国誌』の記載に基づいているが、通詞島から先、口之津のノロシ山、南有馬の鳳上岳を経由した島原城への経路については、『肥後国誌』にも載っておらず、典拠は現状では不明である。

③天草・島原の遠見番所・烽火台

以上の記載に基づき、天草・島原における遠見番所・烽火台をまとめると以下のようになる。

<遠見番所>

- a. 寛永18年（1641）に建てられたもの……富岡・大江崎・魚貫崎
- b. 万治2年（1659）から享保5年（1720、あるいは享保2年）までであったもの……高浜大野崎
- c. 享保2年に加わったもの……牛深・崎津

<烽火台（放火場）>

- a. 享保5年に設置されたもの……魚貫崎、高浜荒尾嶽、富岡（白岩崎・元袋山）、通詞島、口之津ノロシ山、南有馬鳳上岳（推定か）

後述するが、このほか、牛深には烽火台の遺構も残されている。また、島原半島には、加津佐（長崎県南島原市）にも島原藩の遠見番所があるとされるが、今回の烽火台とは無関係であり、さらには詳細な場所、構造等も不明であるため、ここで述べるにとどめておく。

3 遠見番所・烽火台の位置と遺構について

筆者は、2019年11月2～3日にかけて、天草・島原地方の遠見番所、烽火台とされる場所について、現地踏査を行い、平面図作成及び三次元計測等の調査を実施した。

(1) 牛深遠見番所・烽火台（熊本県天草市）

天草下島の最南端の牛深は、東シナ海に面した浦で、東シナ海を長崎方面へ北上する異国船をいち早く見つけることのできる天領の拠点であった。『長崎諸官公衙及附近之図』（長崎歴史文化博物館所蔵）には、牛深の町が描かれており（図2）、海に面して湊見張番所、銀杏山山頂に銀杏山遠見、中腹に中番所が描かれている。湊見張番所は、長崎奉行管轄の番所で、寛政11年（1799）に、長崎奉行の異国船に対する警備強化の一環として新設されたものであり、指図は残されているが、跡地には現在商業施設が建っており、往時の面影を残していない。絵図には、建物の横に御用船が描かれており、緊急時には長崎に急行することができるようになっていたようである。

中番所は、遠見山（銀杏山）中腹の標高約 80 m の牛深の町を見下ろす尾根上に位置している。現在は番所小屋を模した展望所が建てられており、絵図に見るような建物跡や石垣などを確認することはできないが、展望所の周囲には、近世の陶磁器や瓦が多数散布しており、ほぼこの場所にあったことがわかる。絵図中の指図には、土間や押入を備えた 2 部屋の小規模なものとして描かれている。



図2 肥後国天草郡牛深湊御番所図
 (『長崎諸官公衙及附近之図』より(長崎歴史文化博物館蔵))

そして、標高 217 m の遠見山（銀杏山）最高所に、寛永 18 年に設置された遠見番所的小屋が置かれていた。指図では三方に板庇が付く一間の小屋であるが、現在は公園となっており、その痕跡をたどるのは困難になっている。しかし、最高所のすぐ傍らには、約 3 m × 約 5 m、高さ 0.5 m ほどの石組遺構が残されていて、短辺部の一部が開口している(図 3・4)。現地には特に何の表示もないが、後述する荒尾岳の事例や、五島列島の事例から見て、烽火台の遺構とみて疑いないだろう。文書史料には牛深には烽火場の存在は記されていないが、牛深の銀杏山遠見番所にて有事の際には狼煙が上げられ、麓の番所や、周囲の番所、烽火場に伝えるようになっていたものと考えられる。

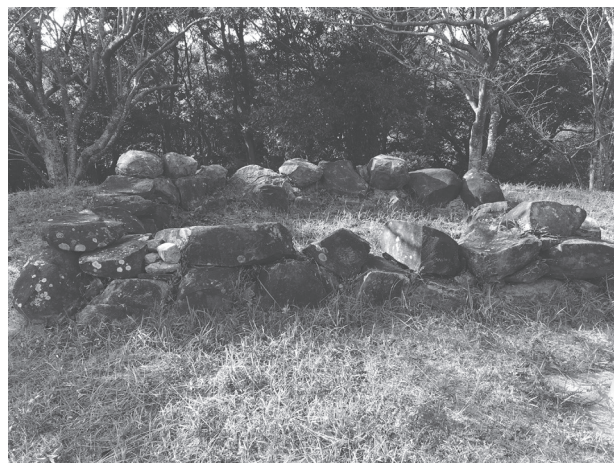


図3 牛深銀杏山遠見番所の烽火台石組遺構

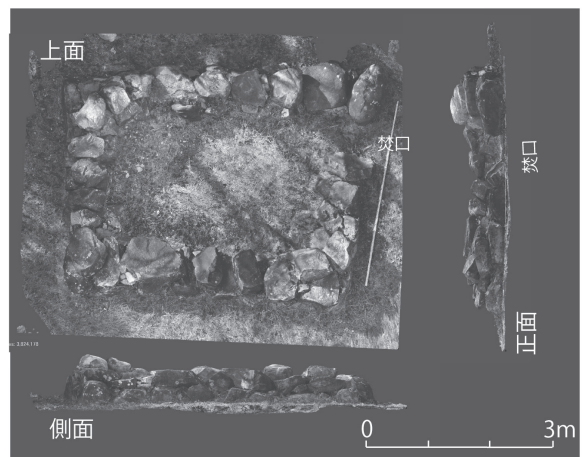


図4 牛深遠見番所の烽火台遺構オルソ画像

(2) 魚貫崎遠見番所・烽火台（熊本県天草市）

牛深の北西約5km、東シナ海に突き出した魚貫崎に近い標高223mの遠見岳山頂に位置する。遠見岳見張番所跡として天草市の文化財に指定されている。山頂からは牛深をはじめ、東シナ海を広く見渡すことができる（図5）。山頂は北東—南西方向に細長く、長軸約50mの自然の平坦地形のちょうど真ん中に、直交するように、南北約10m×東西約8mの土塁状の土盛りで囲まれた方形区画が残されている。東側の一辺は高さが非常に低く、北東隅が開口している一方で、北側の土塁は幅もあり、明瞭な石垣遺構も確認でき、高さも1mほど残されている（図5・6）。平面形状だけを見ると、一見烽火台にも見えなくもない。史跡解説の看板にも、「今も烽火台の跡が残されています」とあり、この遺構を烽火台として認識しているようである。しかし、通常の烽火台よりも規模がひとまわり大きく、さらには周囲に番所小屋に用いられたと考えられる瓦片も散布していることから、烽火台というより、番所小屋の風除けのための土塁状遺構の可能性も考えられる。いずれにせよ、山頂周辺に番所小屋があることは確実で、おそらくはその周辺の平坦地上で狼煙を上げたものと考えられる。



図5 魚貫崎遠見番所の土塁・石垣遺構（北西から）

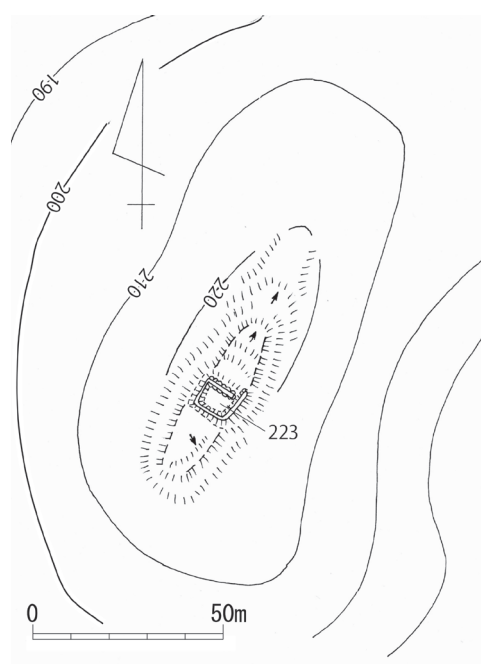


図6 魚貫崎遠見番所現況図（林隆広氏作成）

(3) 崎津遠見番所（熊本県天草市）

魚貫崎から東へ約6km、リアス式海岸の入り組んだ羊角湾の北岸に、世界遺産の天主堂でも有名な崎津集落がある。その崎津集落の南西に突き出した岬が「番所の鼻」と呼ばれ、崎津遠見番所が置かれていたと考えられる（図7）。崎津は享保2年（1717）に牛深と併せて新設された遠見番所である。湾の中ほどに位置することもあって、遠洋を航行する異国船監視よりも、羊角湾内への異国船や密輸船の侵入に備えたものと考えられ、番所の鼻からは湾外から湾内へ入ってくる船を一望することができる。



図7 崎津・番所の鼻遠景（東から）

番所の鼻の現地には、「遠見番所跡」の標柱も建てられており、それには、

「天草西海岸一帯に現われる海賊船、密輸船、難破船などに備えたもので、それ等が発見されるとのろしを上げて各番所間で連絡し合った。(中略) 見張り番所は崎津湾口の突端に有りのろし台はその山上にあったが現在は空地となっている。」

とある。番所の鼻の北側には金毘羅山という山があり、標柱の解説に従えば、その山頂付近にのろし台(烽火台)があったものと考えられるが、現地を見る限り、明確な痕跡は見当たらなかった。烽火台については文書記載もなく、確たる証拠は見つかっていない。

(4) 大江崎遠見番所(熊本県天草市)

寛永18年に富岡、魚貫崎とともに創設された遠見番所とされる。現在、大江崎という明確な岬はよくわかっておらず、大江集落付近にあったことが想定されているくらいで、明確な位置は不明である。現状で確認できている史料としては、『天保国絵図』の「肥後国図」に大江村の西側に「番所」という記載が認められ(図8)、場所から推測するに、天保年間には既に存在していないものの大江崎の遠見番所を指していると考えられる。その場所は、次に述べる荒尾岳の南側にある標高286mのピークとみられるが未踏査であり、詳細はわからない。いずれにしても、次に述べる高濱大野崎のすぐ南側付近にあり、なぜこの両者が併存していた時期があったのかは不明と言わざるを得ない。



図8 肥後国天保国絵図に描かれた大江崎遠見番所
(国立公文書館蔵)

(5) 高濱荒尾岳遠見番所・高濱大野崎遠見番所(熊本県天草市)

大江集落の北側の高濱集落の南西側、標高342mの山頂に高濱荒尾岳の烽火台が位置している。荒尾岳遠見番所跡として、天草市の文化財に指定されている。『肥後国誌』では、遠見番所も烽火台も両方とも高濱にあるとするも、遠見番所は「大野崎」、烽火台は「荒尾岳」として、あたかも別の場所に置かれたかのように記載している。存続年代は、遠見番所は万治2年(1659)から享保5年(1720)の間、烽火台は享保5年に設置されたとしていて、遠見番所を廃止してすぐ烽火台を設置したことになる。決め手に欠くが、荒尾岳の東側には、現在も「大野」という集落があるため、とりあえずここでは、大野崎遠見番所と荒尾岳烽火台は、同じ荒尾岳山頂にあったものとしておくが、詳細な検討は今後必要となろう。

荒尾岳山頂は、東西約60～70mの細長い自然の平坦地形で、山頂部には、内法の一辺約5～6m×約4mのコの字形の石組みが残されている(図9・10)。側面に石垣が積まれた土壇状遺構で、やや立派すぎるくらいもあるが、寸法などから考えても、烽火台の遺構とみてよいであろう。短辺側の一辺はまったくオープンになっているが、五島列島の烽火台の事例にも同様のコの字形のものもあることから、問題ないと考えられる。烽火台の西約25m地点にも、一辺約10～15mの



図9 高濱荒尾岳烽火台

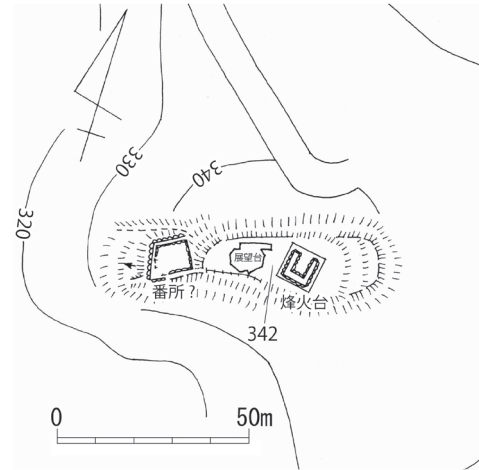


図10 荒尾岳烽火台等関連遺構位置図
(林隆広氏作成)

ややいびつな口の字状の石垣が残されている。これも内外面を石垣で固めており、山頂側の東側のみ、外側は平坦となっている。構造、寸法、位置などから、烽火台に付随する番小屋か、茅・藁の置き場となる小屋の周囲を囲んだ遺構の可能性が考えられる。もしくは享保5年の烽火場設置以前にもここに遠見番所（高濱大野崎遠見番所）があったのならば、その番所小屋の遺構の可能性も考えられるだろう。

(6) 富岡遠見番所・白岩崎／元袋山烽火台（熊本県苓北町）

天草支配の拠点であった富岡には、寛永18年に遠見番所が設置され、享保5年には、富岡の白岩崎と元袋山に烽火台が設置されている。

富岡遠見番所は、正確な位置がわかる記録類を確認できていないが、『天保国絵図』（国立公文書館蔵）には、富岡町のすぐ東側に「番所」の建物記載があり（図11）、城もしくは城下の東寄りであったことが想定される。また、文政6年（1823）に作成された『天草島富岡地勢要図』（天草コレジオ館寄託資料）には、その時点で陣屋となった富岡城三ノ丸の一角の長屋建物に、烽火の伝達する朱線が引かれており、中山圭はここが富岡烽火台だとしているが（中山2020）、おそらくここが当時の遠見番所の建物ではないだろうか。富岡の遠見番所は高所で遠見をするというよりも、各所から伝達されてきた情報を元に、出船拿捕や長崎伝達などの出動が主たる機能だった可能性が高い。

烽火台については、富岡の半島の西沿岸部に、現在も白岩崎という地名が残されており、キャンプ場になっている。東シナ海一帯や高浜の荒尾岳を見渡し、富岡陣屋に

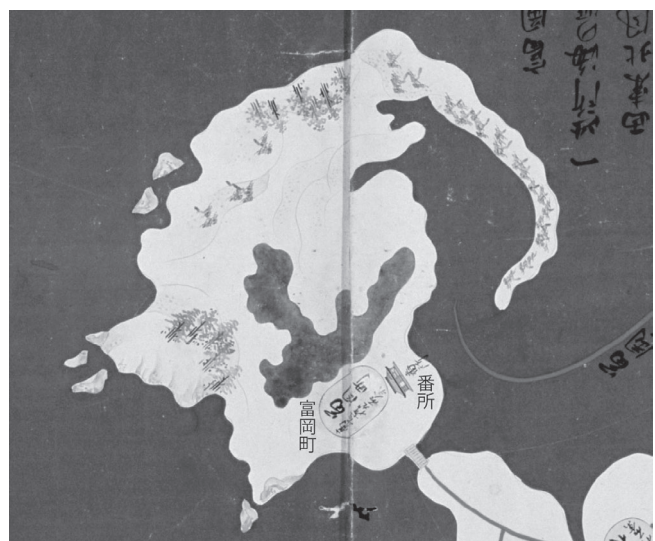


図11 肥後国天保国絵図に描かれた大江崎遠見番所
(国立公文書館蔵)

伝えるには非常に適所であるといえよう。烽火台の遺構は現在確認できないが、場所としては、ほぼ疑いはないであろう。一方の元袋山の烽火台は、渋江鉄郎の記載が認められ、富岡城の北東側には、「元袋」という地名が現在でも確認でき、先の『天草島富岡地勢要図』には、富岡陣屋（城跡）の北西側の丘陵上に「烽火臺」と記されている。さらに白岩崎方面から烽火を受け、富岡陣屋（番所）にリレーしたとする朱線も引かれている。これが元袋山の烽火台を示しているとみてよいだろう。富岡陣屋の北側には、標高約 90 m のピークが二つほどあり、おそらくこの近辺に烽火台があったと考えられる。現地は未確認であるため、今後の現地調査が必要な場所である。

(7) 通詞島烽火台（熊本県天草市）

元袋山あるいは富岡遠見番所から発せられた狼煙は、島原方面へ伝えるため、富岡の東約 6 km の通詞島の烽火台に伝えられた。『五和町史』（五和町史編纂委員会 2003）には、「通詞島の烽火場」として、

「そのとき設置された烽火場の位置は、島一番の高台である現・五和町立歴史民俗資料館の上の高みであろう。現地にはかつてその遺構かとおもわれる石積もあり、下の方には茅薪などの保管場かと思われる石垣もあったが、いまはみられない。」

とある。現地を確認したが、資料館（現・天草市立五和歴史民俗資料館）の裏は標高 45 m の島の最高所となっており、眺望も良いが、後世の改変が激しく、記載のとおり烽火台の痕跡をみることはできなかった。

(8) 口之津烽火台（長崎県南島原市）

通詞島の烽火台からは、早崎瀬戸をまたぎ、北東約 9 km の口之津の半島の中央部にして最高所の烽火山（図 12）に伝達した。『長崎県郷土誌』（長崎県史談会 1933）には、「烽火山」として、

「烽火山は幕府時代外国船の来航を役人が詰切って見張り、一般に知らせて警戒をなさせ、又変時の時は烽火を挙げた。島原乱の時は対岸の天草富岡城と烽火を挙げて、合図をなしたと云ふことである。」



図 12 口之津烽火山遠景

とあり、明確な年代の記載はないが、近世期の烽火台の存在を記している。

烽火山山頂には、神社の祠があるが、その周りを石組みが取り囲んであり、この遺構が烽火台の石組み遺構とみられる。烽火台の遺構は、約 5 m × 3 m の長方形で、隅部が一ヶ所開口している（図 13）。背後にも石組みが連なっているが、当時のものか後世のものかはわからない。過去に行われた測量、試掘調査においても烽火台という所見が出されているが（鏡山・乙益・古田 1964、古田・諫見 1975）、古代大宰府に関連するものとされているが、位置や構造から享保年間のものと推測される。



図13 口之津烽火山烽火台
(左：現況・右：フォトグラメトリーによる三次元オルソ画像)

(9) 鳳上岳烽火台（長崎県南島原市）

口之津の烽火山の烽火台からは、北北東約5 kmの標高409 mの鳳上岳（図14）に伝達したという（渋江1976）。しかし、それ以外に文献記載は見当られず、渋江が何を典拠に、鳳上岳に烽火台があったとしたのかは不明である。ただ、渋江は「鳳上岳（烽火台）」と記載しており、単に山の名称から、烽火台を類推している可能性も否定できない。

鳳上岳の山頂には、「鳳上岳の石積」なるものが残されている。現地にある南有馬町文化財審議会による解説板には、

「頂上の平地（200 m²）に磐座（高さ3 mの神の降臨の巨岩）と磐境（高さ1.7 m 磐座の前提を囲む石垣）らしい石積がある。古代人の祭祀の遺構と思われる」

とある。実際、山頂に行ってみると、最高所のすぐ手前に高さ約3 mの巨岩が立ち、そこから、長さ約25 m、幅約20 mの範囲に石塁が巡っており、まさに解説のとおり状況が残されている。さらに周囲を踏査すると、頂上の西側を除く三方向に延びるように、石列・石塁が南北230 m、東西約100 mの範囲を不整形に巡っているのがわかる。その外周の石列は、北側と南側がそれぞれ途切れて入口が造られている。山頂の磐座を中心に、二重の石列・石塁によって、磐境が築かれている様子が伺われた（図15）。

これが解説のいうように古代のものかどうかはわからないため、それは置いておくが、この山頂部一帯には、近世の烽火台の痕跡を見ることはできなかった。



図14 鳳上岳遠景



図 15 鳳上岳山頂周辺現況図
(岡寺作成)

4 まとめ

以上のように、天草西海岸から島原方面へと続く遠見番所や烽火台の事例を確認した。遠見番所、烽火台それぞれ以下の通りまとめておく。

(1) 遠見番所

天草では、寛永18年に富岡、大江崎、魚貫崎に設置され、のちに高浜大野崎が一時的に設置され、最終的に崎津と牛深が加わり5ヶ所となった。当初は異国船監視に重きが置かれていたものが、のちに密輸船の監視と拿捕に目的が移っていったことによる措置と考えられる。牛深の湊番所、中番所、銀杏山遠見番所は指図が残っているため、建物の構造が判明しているし、現地調査では、中番所に遺物の散布が見られ、銀杏山遠見番所では、番所本体は不明ながら、烽火台の石組みが残されていた。また、魚貫崎では、番所小屋を囲ったとみられる石垣・土手と、瓦の散布、大江崎(荒尾岳)では、烽火台が隣接した形で、番所小屋を囲った石塁・石垣が確認された。崎津、富岡については、伝承・地名や絵図などにより、およその場所は判明したが、詳細な痕跡を見ることはできなかった。

(2) 烽火場(烽火台)

烽火場は、文献では魚貫、荒尾岳、崎津、富岡(白岩崎・元袋山)、通詞島、口之津烽火台、鳳上岳に設置され、烽火を中継しながら、島原へ伝達したことが想定された。確実に烽火台の遺構があったのは、荒尾岳と口之津烽火台であったが、前述のとおり、牛深にも烽火台遺構が残っているため、牛深から富岡を経て、島原方面へと伝達されたことが想定できる。

ただ、口之津から先の島原半島の烽火台については、明確な文書記載を見つけないことができなかったことや、鳳上岳では烽火台の痕跡も見当たらず、さらには鳳上岳から先、島原城下までは22kmもあったため、実際に島原まで狼煙で伝達するには、あと1ヶ所くらいは中継する烽火台が推測され、島原半島での経路は今後さらに文書記載の搜索や現地探査が必要である。ただ、烽火場の設置が、享保5年(1720)と、天領天草が、島原藩の兼帯となった年に設置されていることから、やはり烽火リレーの最終地点は島原だったとみてよいだろう。

一方で、天草島内での烽火の伝達経路は明瞭で、牛深→魚貫崎→荒尾岳→富岡(白岩崎・元袋山)→通詞島→口之津と、それぞれの間の距離が約6～19kmで、現実的な距離間で見通せる経路であったとみられる。また、牛深、魚貫崎、荒尾岳(大野崎)、富岡など、従来より遠見番所が置かれている場所に烽火場が設置されており、牛深から富岡の経路は、遠見番所の運用と併せ、烽火場が設置されていたことがわかる。遠見番所が果たした沿岸警備の役割と、狼煙により伝達すべき情報が、沿岸部における有事や通商船来航といった同じ性格であることを考えれば、当然といえば当然のことであるといえるだろう。

ただし、狼煙の具体的な運用方法については、遠見番所に関する文書史料には記載がなく、具体的な運用が定められていたのかどうかまでは不明である。

おわりに

近世日本の沿岸警備において、烽火（狼煙）は光速で伝達するためのツールとして、盛んに使用されたものと考えられるが、狼煙の発火が、必ずしも堅牢で大規模な施設を必要としたわけでもなかったため、その痕跡を追うのはたやすいことではない。しかし、天草から島原にかけては、現地に遺構も残り、また文書記載もある程度明確に残されていたため、烽火の伝達が、元から設置されていた遠見番所のシステムを一部利用し、遠見番所がないところは、新たに烽火場を設置することで、最終的に島原まで情報を伝達しようとしたものと考えられる。

近世日本の烽火台の事例の中で、リレー形式で情報を伝達しようとしたことがわかるのは、長崎から豊後府内までを繋いだもの（岡寺 2021）と、伊勢湾から尾張藩の名古屋城下までつないだもの（向井 2018）くらいしか確認できておらず、天草の事例は、烽火リレーの実際が具体的にわかる好例であるということができよう。

近世には全国の沿岸部には多くの沿岸警備の遠見番所や、有事を伝える烽火台が数多く設置されていたが、その実態はまだ未解明な部分が多い。それらを解明することで、より具体的な近世日本の沿岸警備体制、海防体制、さらには「鎖国」体制を知ることにつながるだろう。

追記

本稿にて紹介した天草・島原の現地踏査においては、中山圭氏（天草市文化課）、林隆広氏（長崎県立鳴滝高等学校）、竹村南洋氏（長崎市文化課）の諸氏にはお世話になった。記して謝す。

参考文献

- 五和町史編纂委員会 2003『五和町史』五和町
 岡寺 良 2019「福岡藩の玄界灘沿岸警備と遠見番所」『宗像市史研究』第2号 新修宗像市史編集委員会
 岡寺 良 2021a「長崎警備と烽火台」『城郭研究と考古学』（中井均先生退職記念論集）サンライズ出版
 岡寺 良 2021b「佐賀藩・唐津藩の沿岸防衛に関する考古学的研究」『公益財団法人鍋島報効会研究報告書』第10号
 岡寺 良 2022「海防遺跡の考古学 江戸時代は太平の世か？」『月刊考古学ジャーナル』No.769
 鏡山猛・乙益重隆・古田正隆 1964『長崎県口之津町烽火山調査報告』口之津町教育委員会
 渋谷鉄郎 1986『島原ちゃんば』昭和堂印刷総合企画
 中山 圭 2020「肥後・福岡陣屋」『「城」と呼ばれなかった近世城郭一陣屋・御殿・麓一』（令和2年度 第7回九州城郭研究大会資料集）北部九州中近世城郭研究会
 古田正隆・諫見富士郎 1975「口之津烽火山」『口之津貝塚（旧村三軒屋貝塚）及び、口之津烽火（のろし）遺跡調査報告書』百人委員会
 向井一雄「近世狼煙場の遺構」『第57回古代山城研究会例会「古代山城とノロシ～高速軍事通信の実態～」資料集』古代山城研究会

（おかであ りょう・本学文学部准教授）